



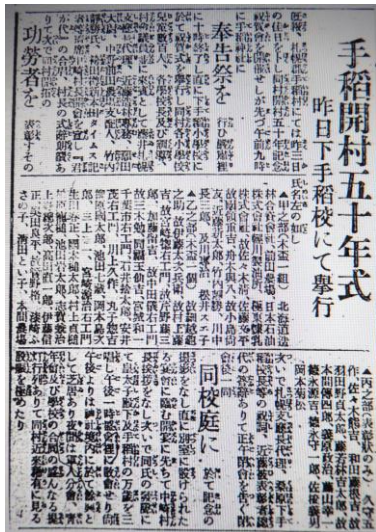
[令和 4 年 12 月 10 日 講演会抄録]

手稲開村 150 年に思う

郷土史家（軽川郷土資料調査室 学芸員・手稲郷土史研究会 前会長） 茂内 義雄 氏

明治 5 年 2 月、当時の発寒村に集団移住した仙台片倉家の旧臣が、その地を割いて手稲村としてから、令和 4 年で 150 年が経ちました。

手稲の周年儀式に関わる事柄について、村や町だった時代には 官民挙げて祝っていたことが、新聞や広報、記念碑建立などから読み取れます。なかでも大正 10 年 9 月 4 日付『北海タイムス』の「手稲開村五十年式」の報道記事は興味深く、「北海道造林」「前田農場」「日本石油製油所」「極東煉乳」などの事業所をはじめ、近藤新太郎、船木與八、竹内静勝、及川専治らが功労者として表彰された様子がつづられています。これは手稲村の基幹産業や人物を知るうえで、たいへん重要な史料といえるでしょう。のちの『新札幌市史』などでも全く触れられていない内容でした。



大正 10 年 9 月 4 日『北海タイムス』より
(札幌市公文書館 所蔵)

悠久の大地という視点で手稲を見るなら、人跡が確認できるのは、約 6000 年前の縄文時代に遡ります。「N1 手稲遺跡」をはじめ、前田や富丘からは 擦文時代に至るまでの遺物が多数出土しています。

アイヌの人々について語るだけの資料は持ち合わせていませんが、地形や自然に因んだアイヌ語地名が、山田秀三先生の解釈でまとめられています。松浦武四郎の『東西蝦夷山川地理取調圖』では手稲山の位置に「タンネ・ウエンシリ」（長い・断崖絶壁）とあります。これは名称ではなく、山の姿そのものを表したとされます。確かに「手稲平和霊園」（西区平和）辺りから手稲山を望むと、恐ろしいほどの絶壁が続いています。アイヌ語で「テイネ・ニタツ」（濡れている・低湿荒蕪地）と呼び表していたのが手稲の語源です。その上にそびえる山であるから手稲山と、和人が名付けました。なお、安政 4 年に箱館奉行の蝦夷地巡検に同行した 玉蟲左太夫の記録には「テイ子ニタツ 小河ウエンシリ ヨリ 落ル」との一文があります。

手稲の最初の和人が誰であるかを 特定するのは難しいところですが、仙堂 某が明治 44 年 3 月に著した『手稲村史原稿』では「明治三年以前の居住者」が示され、これは現在の稲穂にあたります。

開村後の変遷から見えることは、「手稲は“お宝” いっぱいの“魅力”あるまち」だった――。

例えば、① 明治中期より三樽別（現在の富丘）で営業を開始し、天皇家も徳川家もおいでになった「光風館」は“定山溪に勝るとも劣らない温泉宿”と評判を呼びました。② 江戸時代の大家と深い関わりのある「前田農場」は、手稲の開拓・発展とは切っても切れない存在です。③ 手稲は山あり、海近し。観光資源としても無尽蔵です。④ 製油所の爆撃や拓北農兵隊など、負の側面としての“戦争”も見逃せません。⑤ 女流作家の森田たまは『石狩少女』で“軽川の鈴蘭”を描いています。



「軽川温泉場 左翼面より見たる光風館」
(札幌市中央図書館 所蔵 大正期発行の絵葉書より)



昭和初期開校の飛行学校
(札幌市手稲記念館 所蔵)

文学作品や作家の足跡も迎えそうです。⑥「大浜別荘地」の分譲も話題となりました。⑦ 部落を背負っての青年団活動も村の躍動に繋がりました。⑧ 札幌市の史跡「バツタ塚」もあります。…など。

昭和のはじめ、現在の曙に「北日本飛行学校」が設けられたことは手稲の知られざる歴史といえますし、手稲山を植林によって護った「北海道造林」の功績も偉大です。そして何より、手稲が魅力あるまちになり得たのは、明治19年に開削が始まった原野大排水「新川」のお陰でした。地名の由来どおり水捌けが悪く河川の氾濫も多かった手稲の地が、人口14万余を数えるまでに発展したのですから、もっと新川は大事にされてもよいと感じます。

合併についても触れておきましょう。昭和41年10月28日、札幌市の原田與作市長と手稲町の蓑輪早三郎町長により実質的合併の握手が交わされ、42年2月18日に新設の手稲鉄北小学校で廃町式、同年3月1日に合併効力となりました。一年後、「札幌市としても合併条件を精一杯こなしできた」と評価する蓑輪氏の談話が新聞に載り、翌年には「札幌市の誠意度は80点くらい」という元町民の声が紹介されました。村長・町長を20年間務め、全国町村会副会長にも就いた蓑輪氏の業績は枚挙にいとまなく、町長を辞してからの冬季五輪や高校誘致への尽力なども含め、いつか記してみたいものです。

私たちの住むこの地は札幌市政としての手稲区であり、かつての手稲役場ではありません。しかし“ふるさとの歴史”は、次代へと語り継いでいくことが必要です。そこで平成17年、手稲区や区連協の熱き想いと後押しで誕生したのが「手稲郷土史研究会」でした。近年は孤軍奮闘の感も否めませんが、関係機関が協力し合い、会がますます発展していくことを念じております。



講演会 会場風景 (12/10)

※手稲開村150年記念事業『見る 聞く 学ぶ 手稲の歴史』の講演会（公開講座）第二回の発表抄録です。令和4年12月10日（土）午後2時から手稲区民センター ホールにおいて催され、手稲区民を中心に約200名が参加しました。

※当日の講演会に際し、札幌市手稲区長 土井勝雄様よりメッセージをいただきました。以下にご紹介します。

MESSAGE

記念事業「見る 聞く 学ぶ 手稲の歴史」に寄せて

手稲郷土史研究会におかれましては、平素より、永井会長さまをはじめ、会員の皆さまの熱心な研究活動を通じ、ふるさと手稲づくりにご尽力をいただいておりますことに感謝を申し上げます。

このたびは、「見る 聞く 学ぶ 手稲の歴史」と銘打って、パネル展や講演会などの記念事業を開催されましたことに、お祝いを申し上げます。

手稲の地名は、アイヌ語で「濡れているところ」を意味する「テイネ・イ」に由来しており、古くから人々の営みが行われてきた歴史を持つまちです。その後も、交通の要所として栄えてきた手稲は、前田や稲積での酪農への挑戦、手稲鉱山の隆盛、札幌市との合併や冬季オリンピックの開催など、様々な歴史を積み重ね、14万人以上の方が住むまちへと発展いたしました。

手稲区では、こうして紡いで来られた多くの人たちの想いを大切に、緑豊かな自然の中で、魅力あふれる街として、誰もが住んで良かったと感じることのできる「ふるさと手稲」づくりに取り組んでいます。今後も手稲の魅力を次の世代へと引き継ぐべく、多くの方が地域の歴史に触れることで「ふるさと手稲」への意識の醸成に繋がれば幸いです。

結びになりますが、本日の盛会と手稲郷土史研究会の益々のご発展をお祈り申し上げます。

令和4年12月10日

札幌市手稲区長 土井勝雄

「前田」の歴史秘話（2）

▶ 重要な資料「手稲式土器」…

明治45（1912）年、下手稲尋常高等小学校（のちの手稲中央小学校）の教員と児童が、「新川」流域で縄文時代の人びとが生活していたと思われる跡を発見します。しかし、その後、大規模調査が行われたという記録は残ってはいません。

昭和28（1953）年、現在の「発寒古川」周辺で手稲中学校の生徒が完全な形の土器を収集。これがきっかけとなって、昭和29（1954）年には北海道大学の教官の指導のもと、手稲中学校の教員や生徒たちが発掘作業を行います。石狩湾の海岸線から4km内陸の「紅葉山砂丘」の上に位置するこの遺跡からは、縄文時代後期中葉（約3500年前）の石器や土器が多数出土しました。土器は、のちに「手稲式土器」と呼ばれ、その時代を代表する重要な資料となりました。



昭和29年撮影 遺跡発掘作業
〈前田小学校『郷土誌まえた』より〉

▶ 酪農地帯から一大住宅街へ…

酪農の先進地だった前田の農業は、時代とともに大きく変化していきました。「新川」からの“揚水開田”で稲作が盛んになるものの、やがて国の政策により全面休耕。家畜の飼育も、都市化が進むにつれて制約を受けるようになりました。昭和40年代後半には、農地の多くが宅地へと転換され、大規模な造成が進みます。「三晃」、「南平台」、「緑苑」、「ゆたか」、「ほまれ」などを冠した街区公園の名前に、住宅街が急速に形成されていったようすが読み取れます。

▶ 何も無い荒地に“緑”を創出…



令和4年撮影 前田森林公園
〈札幌市公園緑化協会 所蔵〉

令和4年5月に手稲区がおこなったアンケート「わたしの“手稲区自慢”」で、ベスト3にランクインした『前田森林公園』——“思い出を紡ぐ市民の憩いの場”“四季折々の自然が魅力”などがその理由としてあげられましたが、実は、不燃ごみと建設残土とで荒地を埋め立てて市街地をぐるりと緑の丘で囲もうという札幌市の「環状 夢のグリーンベルト構想」によって生まれた公園です。着工は昭和57（1982）年。埋立地を植林し、昭和62（1987）年に開園となりますが、施設の全面オープンは平成4（1992）年で、完成まで10年を要しました。

公園の半分は新たに造られた森林が占め、カナルを挟んで整列する約200本のポプラが異国情緒を醸しています。ポプラ並木は、平成2（2014）年度のNHKの朝の連続テレビ小説『マッサン』をはじめ、多くのドラマのロケ地にもなりました。

▶ 「軽川桜づつみ」への取り組み…

春には桜が咲き誇り、散歩やジョギングのコースとして親しまれる「軽川」ですが、昭和50年代は水面が隠れるほどに草が生い茂り、ごみの不法投棄も後を絶たず、“子どもの遊び場には危険な場所”と言われていました。

そこで、昭和60（1985）年、周辺住民が川の整備のために立ち上がります。当初は堤防の草刈り程度のはずが、「兩岸に桜並木をつくろう」「遊歩道をつくろう」と構想は次第にふくらみ、翌61（1986）年、『軽川と桜並木を育てる会』が発足。川を管理する北海道へ陳情書を提出しました。平成元（1989）年6月、三年計画で整備工事が開始。同年7月には建設省（のちの国土交通省）より「軽川桜づつみモデル事業 北海道第1号」の認定書が届きます。地域からの浄財で桜の苗木が植えられ、またウグイやフクドジョウなどの稚魚の放流も行われて、



令和4年撮影 軽川桜づつみ

